小林秀雄全集

第七卷

小林秀雄全集

第七卷

創元社

小林秀雄全集

第七卷

検印廃止

昭和二十六年七月五日　初版印刷
昭和二十六年七月十日　初版發行

定價　二〇〇圓

著者　小林秀雄

發行者　東京都中央區日本橋小舟町二ノ四　矢部良策

印刷者　東京都千代田區飯田町一ノ二三　中内佐光

發行所　東京都中央區日本橋小舟町二ノ四（大阪市北區樋上町四五）　株式會社　創元社
電話茅場町二〇六四・四〇八三・五二六三
振替東京　一五六五・大阪　五七〇九九

曉印刷・鈴木製本

落丁乱丁本がありましたら取替へます

目次

――無常といふ事――

當麻……一〇
無常といふ事……一三
徒然草……一六
平家物語……一八
西行……二一
實朝……二四

○蘇我馬子の墓……五七
梅原龍三郎……六八
鐵　齋……七四
鐵齋の富士……七七
光悅と宗達……八二
高野山にて……八七
○雪　舟……八九
偶像崇拜……九七
清君の貼紙繪……一〇八
ピカソの陶器……一一四
マチス展を見る……一一六
○年　齡……一一九
○好色文學……一二七
○眞　贋……一三五

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

瓢鮎圖……一四七
悲劇について……一四九

――地獄の季節（ランボオ）――

地獄の季節……一五八
悪胤……一五八
地獄の夜……一六四
錯亂 I……一六六
錯亂 II……一七一
非望……一七七
光……一七九
朝……一七九
別れ……一八〇

——飾　畫（ランボオ）——

大洪水後……一八四
少年時……一八五
小話……一八七
道化……一八八
古代……一八八
Being Beauteous……一八九
生活……一八九
出發……一九〇
王權……一九〇
或る理性に……一九一
酩酊の午前……一九一

斷章……一九二
勞働者……一九三
橋……一九四
街……一九四
轍……一九五
街々……一九五
放浪者……一九六
街々Ⅱ……一九七
眠らぬ夜……一九八
神祕……一九九
夜明け……一九九
花々……二〇〇
平凡な夜曲……二〇〇
航海……二〇一

冬の祭……一〇一
煩悶……一〇一
メトロポリタン……一〇一
野蠻人……一〇三
見切物……一〇四
Fairy……一〇四
戰……一〇五
青年時……一〇五
岬……一〇七
場面……一〇七
歴史の暮方……一〇八
Bottom……一〇八
H……一〇九
運動……一〇九

獣　身……二一〇
デモクラシイ……二一〇
天　才……二一一
（ベッサイダは）……二一二

――韻文詩（ランボオ）――

酩　酊　船……二一六
渇の喜劇……二一九
堪　忍……二二二
オフェリヤ……二二三
谷間に眠る男……二二四

――テスト氏（ヴァレリイ）――

序……二三六
テスト氏との一夜……二三〇
友の手紙……二四一
エミリイ・テスト夫人の手紙……二五一
テスト氏航海日誌抄……二六二
解説……河盛好藏……二七三

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

無常といふ事

當麻

梅若の能樂堂で、萬三郎の當麻を見た。

僕は、星が輝き、雪が消え殘つた夜道を歩いてゐた。何故、あの夢を破る樣な笛の音や大鼓(おほかは)の音が、いつまでも耳に殘るのであらうか。夢はまさしく破られたのではあるまいか。白い袖が飜り、金色の冠がきらめき、中將姫は、未だ眼の前を舞つてゐる樣子であつた。それは快感の持續といふ樣なものとは、何か全く違つたものの樣に思はれた。あれは一體何だつたのだらうか、何と名付けたらよいのだらう、笛の音と一緒にッッッッと動き出したあの二つの眞つ白な足袋は。いや、世阿彌は、はつきり當麻と名付けた筈だ。してみると、自分は信じてゐるのかな、世阿彌といふ人物を、世阿彌といふ詩魂を。突然浮んだこの考へは、僕を驚かした。

當麻寺に詣でた念佛僧が、折からこの寺に法事に訪れた老尼から、昔、中將姫がこの山に籠り、念佛三昧のうちに、正身の彌陀の來迎を拜したといふ寺の緣起を聞く、老尼は物語るうちに、嘗て中將姫の手引きをした化尼と變じて消え、中將姫の精魂が現れて舞ふ。音樂と踊りと歌との最小限度の形式、音樂は叫び聲の樣なものとなり、踊りは日常の起居の樣なものとなり、歌は祈りの連續の樣なものになつて了つてゐる。そして、さういふものが、これでいいのだ、他に何が必要なのか、と僕に絶えず囁いてゐる樣であつた。音と形との單純な執拗な流れに、僕は次第に說得され征服されて行く樣に思へた。最初のうちは、念佛僧の一人は、麻雀がうまさうな顏付きをしてゐるなどと思つ

てゐたのだが。

老尼が、くすんだ菫色の被風を着て、杖をつき、橋懸りに現れた。眞つ白な御高祖頭巾の合ひ間から、灰色の眼鼻を少しばかり覗かせてゐるのだが、それが、何かゞ化けた樣な妙な印象を與へ、僕は其處から眼を外らす事が出來なかつた。僅かに能面の眼鼻が覗いてゐるといふ風には見えず、例へば仔猫の屍骸めいたものが二つ三つ重り合ひ、風呂敷包みの間から、覗いて見えるといふ風な感じを起させた。何故そんな聯想が浮んだのかわからなかつた。僕が、漠然と豫感したとほり、婆さんは、何にもこれと言つて格別な事もせず、言ひもしなかつた。含み聲でよく解らぬが、念佛をとなへてゐるのが一番ましなんだぞ、といふ樣な事を言ふらしかつた。要するに、自分の顏が、念佛僧にも觀客にもとつくりと見せ度いらしかつた。

勿論、小猫の屍骸なぞと馬鹿々々しい事だ、と言つてあんな顏を何だと言へばいゝのか。間狂言になり、場内はざはめいてゐた。どうして、みんなあんな奇怪な顏に見入つてゐたのだらう。念の入つたひねくれた工夫。併し、あの強い何とも言へぬ印象を疑ふわけにはいかぬ、化かされてゐたとは思へぬ。何故、眼が離せなかつたのだらう。この場内には、ずゐ分顏が集つてゐるが、眼が離せない樣な面白い顏が、一つもなささうではないか。どれもこれも何といふ不安定な退屈な表情だらう。さう考へてゐる自分にしたところが、今どんな馬鹿々々しい顏を人前に曝してゐるか、僕の知つた事でないとすれば、自分の顏に責任が持てる樣な者は一人もゐないといふ事になる。而も、お互に相手の表情なぞ讀み合つては得々としてゐる。滑稽な果無い話である。幾時ごろから、僕等は、そんな面倒な情無い狀態に墮落したのだらう。さう古い事ではあるまい。現に眼の前の舞臺は、着物を着る以上お面も被つた方がよいといふ、さういふ人生がつい先だつてまで嚴存してゐた事を語つてゐる。

假面を脫げ、素面を見よ、そんな事ばかり喚き乍ら、何處に行くのかも知らず、近代文明といふものは駈け出した

らしい。ルッソオはあの「懺悔錄」で、懺悔など何一つしたわけではなかつた。あの本にばら撒かれてゐた當人も讀者も氣が付かなかつた女々しい毒念が、次第に方圖もなく擴つたのではあるまいか。僕は間狂言の間、茫然と惡夢を追ふ樣であつた。

中將姫のあでやかな姿が、舞臺を縱橫に動き出す。それは、歷史の泥中から咲き出でた花の樣に見えた。人間の生死に關する思想が、これほど單純な純粹な形を取り得るとは。僕は、かういふ形が、社會の進步を默殺し得た所以を突然合點した樣に思つた。要するに、皆あの美しい人形の周りをうろつく事が出來ただけなのだ。あの愼重に工夫された假面の內側に這入り込む事は出來なかつたのだ。世阿彌の「花」は祕められてゐる、確かに。

現代人は、どういふ了簡でゐるから、近頃能樂の鑑賞といふ樣なものが流行るのか、それはどうやら解かうとしても勞して益のない難問題らしく思はれた。たゞ、罰が當つてゐるのは確からしい、お互に相手の顏をヂロヂロ觀察し合つた罰が。誰も氣が付きたがらぬだけだ。室町時代といふ、現世の無常と信仰の永遠とを聊かも疑はなかつたあの健全な時代を、史家は亂世と呼んで安心してゐる。

それは少しも遠い時代ではない。何故なら僕は殆どそれを信じてゐるから。そして又、僕は、無要な諸觀念の跳梁しないさういふ時代に、世阿彌が美といふものをどういふ風に考へたかを思ひ、其處に何の疑はしいものがない事を確かめた。「物數を極めて、工夫を盡して後、花の失せぬところを知るべし」美しい「花」がある、「花」の美しさといふ樣なものはない。彼の「花」の觀念の曖昧さに就いて頭を惱す現代の美學者の方が、化かされてゐるに過ぎない。肉體の動きに則つて觀念の動きを修正するがいゝ、前者の動きは後者の動きより遙かに微妙で深淵だから、彼はさう言つてゐるのだ。不安定な觀念の動きを直ぐ模倣する顏の表情の樣なやくざなものは、お面で隱して了ふがよい。彼が、もし今日生きてゐたなら、さう言ひたいかも知れぬ。

僕は、星を見たり雪を見たりして夜道を歩いた。あゝ、去年の雪何處に在りや、いや、いや、そんなところに落ちこんではいけない。僕は、再び星を眺め、雪を眺めた。

無常といふ事

「或云、比叡の御社に、いつはりてかんなぎのまねしたるなま女房の、十禪師の御前にて、夜うち深け、人しづまりて後、ていとう〳〵と、つゞみをうちて、心すましたる聲にて、とてもかくても候、なう〳〵とうたひけり。其心を人にしひ問はれて云、生死無常の有樣を思ふに、此世のことはとてもかくても候。なう後世をたすけ給へと申すなり、云々。」

これは、一言芳談抄のなかにある文で、讀んだ時、いゝ文章だと心に殘つたのであるが、先日、比叡山に行き、山王權現の邊りの靑葉やら石垣やらを眺めて、ぼんやりとうろついてゐると、突然、この短文が、當時の繪卷物の殘缺でも見る樣な風に心に浮び、文の節々が、まるで古びた繪の細勁な描線を辿る樣に心に滲みわたつた。そんな經驗は、はじめてなので、ひどく心が動き、坂本で蕎麥を喰つてゐる間も、あやしい思ひがしつゞけた。あの時、自分は何を感じ、何を考へてゐたのだらうか、今になつてそれがしきりに氣にかゝる。無論、取るに足らぬある幻覺が起つたに過ぎまい。さう考へて濟ますのは便利であるが、どうもさういふ便利な考へを信用する氣になれないのは、どうしたものだらうか。實は、何を書くのか判然しないまゝに書き始めてゐるのである。

一言芳談抄は、恐らく兼好の愛讀書の一つだつたのであるが、この文を徒然草のうちに置いても少しも遜色はな

い。今はもう同じ文を眼の前にして、そんな詰らぬ事しか考へられないのである。依然として一種の名文とは思はれるが、あれほど自分を動かした美しさは何處に消えて了つたのか。消えたのではなく現に眼の前にあるのかも知れぬ。それを摑むに適したこちらの心身の或る狀態だけが消え去つて取戻す術を自分は知らないのかも知れない。こんな子供らしい疑問が、既に僕を途方もない迷路に押しやる。僕は押されるまゝに、別段反抗はしない。さういふ美學の萌芽とも呼ぶべき狀態に、少しも疑はしい性質を見付け出す事が出來ないからである。だが、僕は決して美學には行き着かない。

確かに空想なぞしてはゐなかつた。青葉が太陽に光るのやら、石垣の苔のつき工合やらを一心に見てゐたのだし、鮮やかに浮び上つた文章をはつきり辿つた。餘計な事は何一つ考へなかつたのである。どの樣な自然の諸條件に、僕の精神のどの樣な性質が順應したのだらうか。そんな事はわからない。わからぬ許りではなく、さういふ具合な考へ方が既に一片の洒落に過ぎないかも知れない。僕は、たゞある充ち足りた時間があつた事を思ひ出してゐるだけだ。自分が生きてゐる證據だけが充滿し、その一つ一つがはつきりとわかつてゐる樣な時間が。無論、今はうまく思ひ出してゐるわけではないのだが、あの時は、實に巧みに思ひ出してゐたのではなかつたか。何を。鎌倉時代をか。さうかも知れぬ。そんな氣もする。

歷史の新しい見方とか新しい解釋とかいふ思想からはつきりと逃れるのが、以前には大變難かしく思へたものだ。さういふ思想は、一見魅力ある樣々な手管めいたものを備へて、僕を襲つたから。一方歷史といふものは、見れば見るほど動かし難い形と映つて來るばかりであつた。新しい解釋なぞでびくともするものではない。そんなものにしてやられる樣な脆弱なものではない、さういふ事をいよいよ合點して、歷史はいよいよ美しく感じられた。晩年の鷗外が考證家に墮したといふ樣な說は取るに足らぬ。あの厖大な考證を始めるに至つて、彼は恐らくやつと歷史の魂に推

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.